定本

與謝野晶子全集

第二十卷

講談社

定本　與謝野晶子全集

第二十卷　評論　感想集七

昭和五十六年四月十日　第一刷發行
定價　三千五百圓
著者　與謝野晶子
發行者　野間惟道
發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽二丁目三十二
郵便番號一二二　振替　東京八一三五〇〇
電話東京(〇三)九四五一一二一一(大代表)
組版　信每書籍印刷
印刷所　多田印刷株式會社
製本所　大製株式會社
落丁本・亂丁本はお取替えいたします
© 與謝野光　一九八一年
0395-261302-2253(0)(文事) Printed in Japan

目次

街頭に送る

自序……三
健全な心……六
人生の本流……九
親として……一三
女子と思想……一五
詩に就いて……一八
嚴肅な一考察……二四
伊豆の旅……三〇
雜木の花……三三
眞の短歌と擬態的短歌……四〇

晩春遊記……四三
貞操の自覺……四九
矛盾の竝存……五三
涙の記……五五
日本人としての自己認識……五八
愛と人間性……六一
初夏の花……六四
政治と大衆教育……六七
松風莊の記……七〇
紅　梅……七三
傍觀者の言葉……七五
武藏金澤の一日……七八
月二夜……八一
女子と文學……八五
男女の貞操……八七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

社會政策その他……九〇
蛙を聽く……九三
無產者は暴力を否定す……九五
連續したる雜感……九八
横濱の一日……一〇二
感謝の言葉……一〇五
改削問題その他……一〇八
緊縮時代の覺悟……一一
曝書をしながら……一一四
資本主義と資本家の別……一一〇
南米に行く義弟……一一三
心の裸踊……一一五
農業生產の統制……一一九
暴露に過ぐ……一一二
表面觀察に停まる對人批評……一一五

冬枯の野に住みて……一三九
支那が觀たい……一四三
不釣合……一四五
見苦しき服裝……一四八
國語國字の尊重……一四九
婦選に就いて……一五三
眞の批評の無い時代……一五五
物質生活の節約……一五八
郊外の家……一六一
女子の中等教育改善……一六三
自分が歌を作る態度……一六五
新春雜感……一六八
急速度の展開……一七一
讀後小感……一七四
用語の魔術……一七七

夢の記……一八〇
女學生の文章……一八三
文人の死……一八六
次男の手紙……一八九
座談から……一九一
辯舌と文章……一九四
國民の自發的緊張……一九七
凛として光る一票……二〇一
新聞紙の威力……二〇四
山陰遊記……二〇七
名栗の谷……二二七
九州の旅……二三〇
北備溪谷の秋……二五六

優勝者となれ

自　序……二六七
日本國民たることの幸ひ……二六九
多數の青年男女は堅實である……二七三
優勝者となれ……二七八
すべて自己に立脚せよ……二八二
青年の思想善導に就いて……二八五
階級鬪爭の非……二八九
私の歌を作る心持……二九四
家庭と好學の氣風……三二四
日本人の潔癖……三二八
我家の庭……三三一
發音式假名遣抗議……三三五
筑波山と潮來……三三八

歌の添削……三三三
紙の花……三三七
子供達の入學……三四一
無用の冒險……三四四
對牡丹記……三四七
近畿の旅……三五一
女子と戀愛の偏重……三五六
勤勞主義の教育……三六〇
北陸の雪……三六四
高きへ憧れる心……三六九
九州の旅……三七二
石井柏亭先生を祝ふ……三七六
鰹……三八〇
命を削る……三八四
蘇峰先生を祝ふ……三八五

鶯……三八七
四國遍路の記……三八八
大衆の實行力……三九一
法師溫泉の記……三九四
冬の禮讚……三九九
鵞を愛する心……四〇二
眞鶴、吉濱、湯河原……四〇七
國民と兇變……四一四
中等教育と習字……四一六
新しい母性愛……四二〇
北海道より……四二五
女子と修養……四三二
東四省の問題……四五〇
支那の近き將來……四五三
日支國民の親和……四五六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上越國境の旅……四五九
心頭雜草……四六三
國民振肅の時……四六六
自殺に就いて……四七〇
女子の活動領域……四七四
純文學の要求……四九〇
雨窗雜記……四九三
女子の獨立……四九六

巴里より

巴里まで……五二九
巴里にて……五三七
巴里の旅窓より……五四〇
海峽の船……五四九
倫敦より……五五一

倫敦の宿……五五八
巴里の獨立祭……五六〇
日記の一節……五六五
杜鵑亭……五六七
髑髏洞……五七三
ミュンヘン……五七五
維納……五八一
伯林の一瞥……五八三
和蘭陀へ着いた夜……五八五
巴里に於ける第一印象……五九〇
平野丸より良人に……五九六
解題　編集部
解説　木俣修

装幀　アド・フアイブ

街頭に送る

自序

私は二拾年前から幾たび自分の感想集を公にしたことか、自ら數へてみようにも一一記憶してゐない。自分の書齋を振り返つて見ても、殆ど全部が散逸してしまつて、唯だ近年の出版である「光る雲」一册が架上に殘つてゐるに過ぎない。茲に講談社出版部の厚意に由つて出版せられる「街頭に送る」一册は、その「光る雲」以後に筆を執つたものから取捨し、感想を主として收め、なほ一二の紀行を加へたものである。

私は早くから自分の無力を知つてゐる。從つて目前の世相に對して常に傍觀者の立場から一歩も踏み出さない事にしてゐる。例せば私が婦人解放や婦選問題を主張してゐることは明治以來のことでありながら、謂ゆる婦人運動に對しては直接に參加してゐない。併し冷淡なる傍觀者では決してない。却て世相の種種に對して人一倍關心を持つてゐる一人の女である。私は少女時代から素性として視野が多方面に向ひ、それに對して人知れず喜憂の心が動く。中にも政治、經濟、女子教育等の問題に最も摯實な關心を持ちつづけてゐる。唯だ實際の運動にまで進出しないのは、その點に無力であり不適任であることを知つてゐるからである。

私の感想には、從來の讀者が認めてゐて下さるやうに、時に主張もあれば他に呼び掛ける態度のものもないではないが、それとても傍觀者たる立場を踏み出してゐるのではない。勿論指導者とか說教者とかの僭越な意圖は少しもない。要するに世相に關心を持つ餘りの獨語である。それなら、

なぜ獨語を筆にするのか。外の目的は無く、唯だ日記の積りである。私自身がどんな風にどんな問題を考へてゐるかを、自分の文章を鏡として映して見るのである。云はば自分の心上の明暗を自分で見るためのものである。私と云ふ一人の女の寂しい記錄に過ぎない。

それなら、活字にする必要は無い筈である。その事も私は十二分に知つてゐる。併し最近の私は、かやうな物でも街頭に提供するのでなければ、經濟的に家族を扶養し得られない境遇に喘いでゐる。從來の十幾册かある自分の感想集は、すべて書肆から望まれて出版したが、此の一册だけは私自身から進んで書肆に出版を懇請した最初のものである。私が如何に窮迫してゐるか、讀者の諒察を得たい。譬へば自ら眺めるために園に植ゑた手作の花を切花として賣るやうなものである。私には涙なきを得ない。

併し云ひ添へて置きたいことは、此中の一篇一篇は、毫も初めから商品として筆にしたもので無いと云ふことである。固より書きたいから書いた。新聞雜誌から望まれて書いたものにせよ、書きたくないものは書かなかつた。他から出された課題に應じて書いたものは一篇もない。この意味で私は自分が歌や詩を作る場合と同じく、自己の創作衝動を滿足させるために自發的に書いた。從つて、良心的に省みて自己を曲げたり僞つたりした所は少しも無い。唯だかやうなものを自分から進んで街頭に送るに到つたことを愧ぢずにゐられない。

今の元氣旺盛な若い文筆婦人達は、或は此序を讀まれて「そんな事は愧ぢるに及ばない、當然の事だ」と笑はれるかも知れない。併し私には其れだけの自信も大膽も持合さない。手作の色も匂ひもない花を、自分から商品とはしたくないのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com